文明の誕生

――古代アンデスの事例から――

渡部森哉

【要約】 古代アンデス文明の始まりは紀元前三〇〇〇年に遡り、その指標は神殿建設とされる。形成期（前三〇〇〇－五〇年）に多くの神殿が建設されたが、各神殿は石や日干しレンガなどの建築材で同じ場所で建て直されることで結果的に大規模化した。また神殿の建設、更新活動の継続に伴い社会が大規模化、複雑化した。神殿の建設は、儀礼に関わる集団の実践の結果であり、当事者が意識、予想しない結果をもたらしたと言える。形成期の神殿を中心とした社会は国家や首長制社会など政体の既存の分類モデルでは十分に説明できないため、リチュアリティーという考えを導入する。また宗教的儀礼と神殿などの物質の関係を整理するためリチュアル・エコノミーという概念を援用し、政治と経済の要素が儀礼に埋め込まれている関係性を記述する。最後に初期の神殿の更新活動のメカニズムを、競合や個人のリーダーシップではなく、協同、集合行為という概念を用いて説明する。

史林　一〇二巻一号　二〇一九年一月

一　はじめに

今から二〇万年前までにはホモ・サピエンスが誕生し、地球上に拡散した。ホモ・サピエンスはほとんどの時間を比較的小規模な集団で移動性の高い生活をして過ごしてきた。しかしその後、世界のいくつかの場所で、文明と呼ばれる大規模で複雑な社会形態が発展し、それは地球上の人間の大部分を飲み込むこととなった。

本論文では文明がどのように始まったのか、そして文明初期の社会がどのような特徴を有していたのかを議論する。事例として、南米大陸の古代アンデス文明を取り上げる。アンデス考古学では、文明と認められる社会が発展した初期の時代を形成期と呼ぶ。国家と呼ばれる政治的指導者を中心とした社会は後一世紀に誕生するが、形成期はそれよりも前の時代であり、神殿、そこで見つかる遺物の特徴に基づき時期区分されている。本論では形成期の編年として、早期（前三〇〇〇－一五〇〇年）、前期（前一五〇〇－一二〇〇年）、中期（前一二〇〇－八〇〇年）、後期（前八〇〇－五〇〇年）、末期（前五〇〇－五〇年）という区分を用いる（加藤・関編 一九九八）。

二章でアンデス文明形成期研究の流れを概観し、三章、四章でアンデス文明初期の社会の特徴を説明し、五章で文明形成のメカニズムについて考察する。六章から八章でアンデス形成期社会を記述する枠組みについて論じる。最後に議論をまとめ、今後の課題について述べる。

二　アンデス文明の起源を求めて

日本のアンデス文明調査団が組織されたのが一九五八年。それ以来現在まで、日本人のアンデス研究者の多くが研究対象としてきたのがアンデス文明の形成期と呼ばれる、前三〇〇〇年から前五〇年頃の約三千年間の時代である。日本人によるアンデス考古学研究は、初期の比較的小規模な社会ではなく、当初から文明という大規模で複雑な社会を対象としてきた。

日本調査団は一九六〇年に、ペルー北高地のアンデス山脈の東斜面に位置するコトシュという遺跡を発掘し（図1）、先土器時代の神殿の存在を実証的に明らかにした（Izumi & Sono [eds.] 1963; Izumi & Terada [eds.] 1972; 鶴見・サラ 二〇一六）。それはゴードン・チャイルドによる枠組みが広く受け入れられていた一九六〇年代当時の常識には当てはまらない事実であり、世界的な大発見であった（チャイルド 一九五七［一九三六］）。

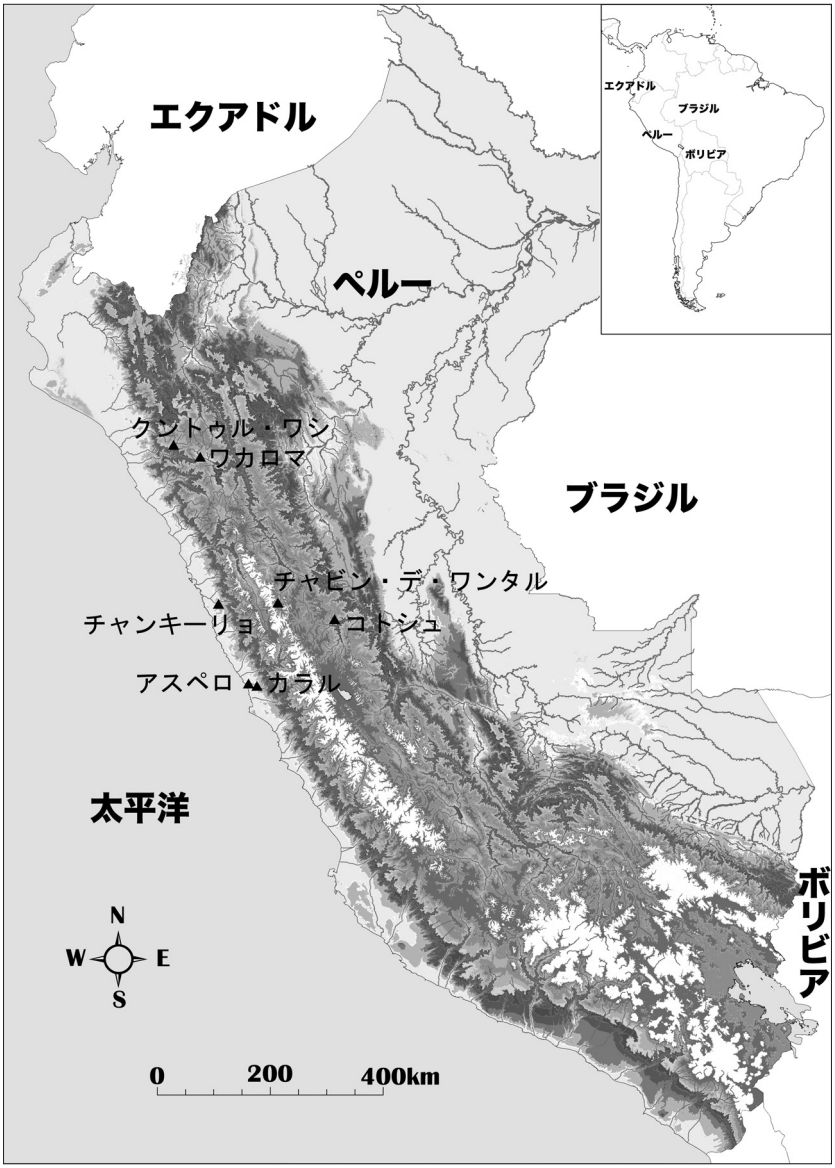

図１　本論文で言及する遺跡

チャイルドの考えに従えば、人類史において新石器革命と都市革命という大きな出来事があった。人類は新石器時代に定住、農耕、牧畜を始め、それに伴い家を造るために木を加工する磨製石斧があらわれ、定住生活に伴い主に植物を煮るための土器製作が始まった。それが新石器革命と呼ばれる。そして農耕が集約化するにつれ、余剰生産物が生まれ、それに伴い食料生産に携わる人々とそうでない集団が分離し、そうして様々な職業が生まれ、文字が使用されるようになった。それをチャイルドは都市革命と呼んだ。人間は集住し、政治経済的機能の集中する都市が生まれ、宮殿や神殿などの公共建造物が建てられた。そして都市を含む社会は文明と呼ばれた。

社会の生産様式に注目したチャイルドの枠組みは非常に理解しやすいため一つのパラダイムになっていた。もちろんヨーロッパの事例を中心に組み立てられたチャイルドのモデルが、全世界にそのまま適用できるわけではないことは認識されていた。例えば第二次世界大戦後、西アジアでは農耕は始まっているが土器がまだ製作されていない時代の存在が確認され、先土器新石器時代と命名された（三宅 二〇一五）。しかし、それは西アジアにおいて新石器時代の要素が時間差を伴って出現することを示しているのみであり、また、主食となる麦は臼で製粉されて食べられたと考えられるため、農耕を基盤としているという点では、チャイルドの枠組みは揺らぐことはなかったのである。

そして一九六〇年のコトシュの発見が続く。アンデスでは新石器革命の指標である土器製作よりも前に、都市革命の指標である公共建造物（神殿）が建設された。それは農耕によりトウモロコシやジャガイモなどが本格的に栽培される前の時代のことであった。そのため、チャイルドの枠組み自体を根本的に問い直す必要性が生じた。

先土器時代の神殿は、その後アンデスの他の遺跡でも相次いで見つかり、コトシュが例外ではなかったことが明らかとなっている。現在のところ最古の神殿群はペルーの海岸地帯にあり、その年代は前三〇〇〇年より古くに遡るとされている（Fuchs *et al.* 2008, 2010）。そして神殿建設は場所を変えながら三千年間も続き、その間に国家は生まれなかった。[1] 安定しているとみることもできるが、発展しなかったと説明することもできる。

またトルコのギョベクリ・テペ遺跡の事例が示すように、西アジアでも先土器時代に宗教的建造物が存在したことが明らかとなった（Schmidt 2009）。しかし、アンデスの事例は、三千年もの間、連続的に神殿を作り続けた点が西アジアの例と異なる。また西アジアの事例では、ギョベクリ・テペがメソポタミア文明の始まりと認定されるわけではなく、文明の始まりはもっと後の時代におかれる。大規模な建造物の建設が連続したわけではなく、停止したためである。

アンデスの事例は世界的に見て非常にまれである。またアンデスはしばしば、文字、貨幣、市場、製鉄技術、車輪などが欠如しているという点でも、例外的に扱われる。本論では、アンデス文明を例外としてではなく、文明の一形態、レパートリーの一つとして扱うことで、古代文明の特徴をより汎用性のある方法で論じる。アンデスの場合、例えば図像や建築に認められる構造など（渡部 二〇一〇）、形成期からインカ帝国まで連続的、あるいは断続的に引き継がれた要素があった。本論文では、アンデス文明の最終期に登場したインカ帝国（後十五-十六世紀）などを参照しつつ、文明の興りを考えていきたい。

① ポゾルスキー夫妻は形成期のカスマ谷の事例を基に形成期社会を国家として捉えている（Pozorski & Pozorski 1987）。しかし形成期社会を国家と捉える立場は少数派である。

三　文明、複雑性の特徴

ここではタイプとしての文明とプロセスとしての文明を分け、議論を整理したい。タイプとしての文明とは、人間集団の文化システムではなく、社会システムの一つのあり方をいう（大貫 一九九一）。精巧な文化的作品であっても、それが小規模社会のものであるならば、文明の要素とは見なされない。文明とされるのは、あくまで大規模で複雑な文明社会の文化的要素である。換言すれば文化的要素を社会システムよりも優先させては、文明を的確に捉えることはできない。

以上のような社会のタイプとして文明を静態的に捉える見方とは異なり、プロセスとしての文明とは、各社会そして諸

社会間関係の大規模化・複雑化の過程のことを指す。このプロセスに含まれる個別の社会がタイプとしての文明社会である。本論の目的は文明が成立した過程、メカニズムを考察することであり、個別の社会が文明かどうかを判定する基準を設定することや、社会を静態的に捉え、社会間の線引きをし、タイプ分類することではない。

大規模とは人口の多いこと、複雑とは多種多様な人間集団、およびそれに伴う物質的証拠が認められるということである。現在は文明という用語ではなく、複雑性（complexity）、複雑社会（complex society）という概念が用いられる場合が多いが、文明社会の事例は複雑社会に含まれる。

アンデス研究者のジャスティン・ジェニングスは近著『文明を殺める』で、段階としての文明、社会のタイプとしての文明の問題点を指摘している（Jennings 2016）。そして文明という概念を用いずに、アーバニゼーション（都市化）、植民化、国家形成、文化ホライズン（大規模な相互交流ネットワーク）という四つの要素に分解して議論することを提唱している（Jennings 2016: xii）。しかし、これら四つの要素はいずれも文明の一つの表れであり、そのメカニズムを説明するものではない。それらの動きを総体として捉え、全体的に記述するための概念としての文明は有効であり、アンデス文明やメソポタミア文明などを他の言葉で置き換えるのは難しいであろう。ちなみにジェニングスが挙げた四つの要素のうち、アンデス形成期の事例を考える際に重要なのは文化ホライズンであり、他の三つの要素は後の時期に登場する国家に伴う特徴である。

これまで複雑社会の特徴のうち、階層性という人間集団の上下関係に重きが置かれていたが、現在ではそれだけではなく、水平方向の、職業や性別などによる役割分担による複雑性、換言すれば階層性ではない複雑性が注目され、それを説明するためヘテラルキーという概念などが用いられる[①]（*cf.* Crumley 1987, Kohring & Wynne-Jones [eds.] 2007）。複雑性を、ケント・フラナリーは、集中性（centralization）と分離性（segregation）という二つの変数に分解し（Flannery 1972）、ランドール・マグワイアは不平等（inequality）と不均質（heterogeneity）という変数に分解した（McGuire 1983）。いずれも垂直

方向の複雑性と、水平方向の複雑性を示している（Chapman 2007）。いかなる社会でもある程度の複雑性は認められるが、文明社会の場合、複雑性が増加する志向性を有する点が特徴である。

アンデス文明の最終形はインカ帝国である。そこから、そうした大規模で複雑な社会が生じる始まりはいつまで遡るかを考えると、神殿に行き着く。それらは祭祀センター、より一般的に記念碑的建造物と呼ばれる建築のことである（Burger & Salazar 2012）。

アンデス形成期の神殿遺跡は数百確認されているが、それらは全て一夜にしてできたわけではなく、長期間のプロセスの結果として大規模化した。現在観察できる遺跡の姿は、最終的に到達した神殿の規模を示している。文明をそうした長期間にわたる流れとして考える際に重要なのは、諸社会間の関係が大規模化、複雑化するメカニズムを総合的に説明する枠組みである。

① ヘテラルキーは本来、一九四五年にウォーレン・マカロックが用い始めた言葉であり、ヒエラルキーではない関係を指すのに用いられた。それを考古学に応用を始めたのがキャロル・L・クラムリーである（Crumley 1987）。そしてヘテラルキーを「上下関係ではない場合の要素間の関係を指し、様々な方法で上下関係が生まれうる」（Crumley 1995）と定義し、ギル・スタインは「ヘテラルキー概念の鍵となる考え方は、権力関係が柔軟で、偶然的で、常に変化しうるという点にある」（Stein 1998: 7）と補足する。このように、階層化されない権力関係を指すために、また不平等が維持されるという意味で静態的な概念であるヒエラルキーに対し、変化やプロセスを意識した動態的な概念としてヘテラルキーが提唱された。

四　アンデス文明形成期

アンデス形成期の社会単位の中核に神殿があると想定される（Burger & Salazar 2012: 409）。そして形成期研究では、カラル、アスペロなど各神殿の名称を用いて、社会間の関係を議論する。便宜上、神殿の建設活動を行う集団と、そこで行われる儀礼に参加する集団が一対一で対応すると想定される。そして一つの社会単位に神殿が複数あるとは想定されない。

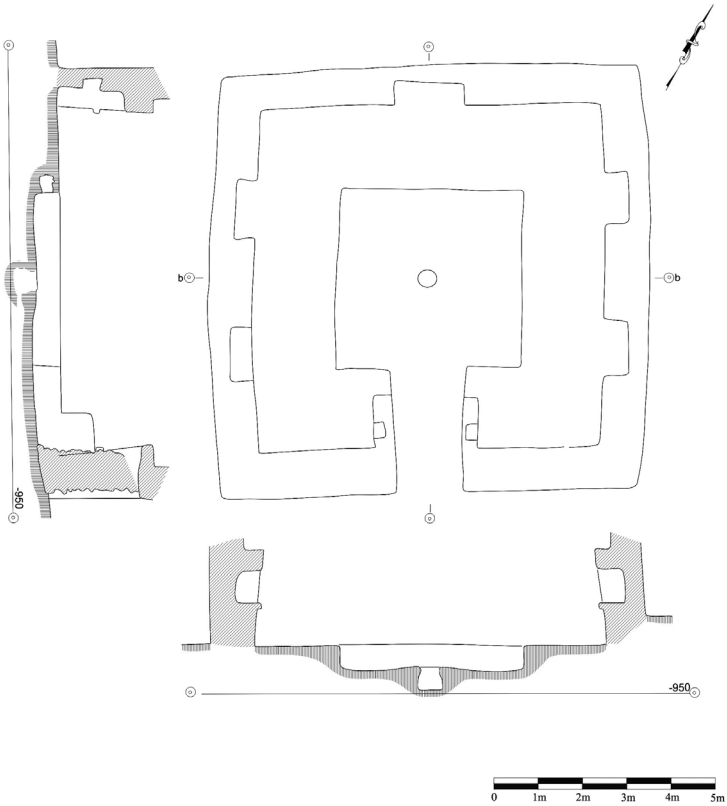

図２　コトシュ遺跡の交差した手の神殿（Izumi & Terada [eds.] 1972）

一方、同時代に神殿を有しない社会も存在するが、それらはここでの議論の対象外である。むしろ形成期早期には神殿を建設する範囲は狭く、神殿が分布しない地域の方が広かった。

コトシュ遺跡はいくつかの建造物が連なり、重なり合った神殿であるが、最も有名なのは「交差した手の神殿」と呼ばれる部屋状の建物である（Izumi & Sono [eds.] 1963; Izumi & Terada [eds.] 1972; 大貫 一九九八）。それは一辺が約九・五メートルの大きさの方形の建物で南側に出入口があり、中央の炉は地下式の空気孔によって外部と繋がっている（図２）。重要なのはこうした建物が複数互いに通路や階段によって連結されており、しかもそれらが何度も作り替えられた結果、大きくなったということである。つまり古

い建物が下に埋まっているのである。最古の建造物の年代がしばしば問題となるが、ここでは初期の建物の規模はそれほど大きくなかったと予想されるということを確認しておきたい。

ペルー北部高地カハマルカ地方に位置するワカロマ遺跡でも、古い建物が中に埋め込まれ更新されている（Terada & Onuki [eds.] 1982, 1985, 1988）。タマネギの皮をむくように内部の古い時代の建物を掘り進めていくと、形成期前期の一番古い層で部屋状構造にたどり着く。それらは三×二メートル程度の大きさの部屋状構造が複数連なったものであり、基壇の上に載っている建物もある（関 二〇〇六：五六-六一）。他の遺跡でも同様に、初期の神殿は、それ自体は大規模でも複雑でもないと予想される。最初の建築がどれだけの規模があるか、どのような特徴があるかに着目して、その段階でそれが文明かどうかを議論することは建設的ではない。その場に祭祀建造物が建設され続けたこと自体が重要なのであり、社会が大規模化し複雑化する動きが始まるきっかけとなったことは間違いない。また個別の建築を見れば、類似しているが文明社会の要素ではない建物は他にもあるであろう。神殿が更新されるに従い巨大化する過程を、形成期中期から後期にかけての神殿チャビン・デ・ワンタルの事例を見てみたい（渡部 二〇一〇、二〇一三）。前の建物を内部に埋め込む他、既存の建物の横にブロックのように連結していくという更新の特徴を有している（図3・図4）。

形成期の神殿は同じ場所で建て直されることによって大規模化した。神殿の更新に関しては、必要な労働力が増すという考え方と、そうではなくほぼ一定の数の人々が行うという考え方の、大きく二つの考えがある（渡部 二〇一三）。更新に必要な労働力がある期間では一定であったとしても、形成期早期から後期にかけての間に神殿の設計、図像、物質文化などのレパートリーが増大していったこと、また神殿そのものの分布範囲が広まっていったことは明らかである。そして長期的に見れば、神殿が大規模化するほど更新に必要な労働力、時間が増大し、神殿での活動に参加する人数も増える方向性は明確である。神殿を更新するという意味では、質的な変化は生ぜず、引き起こされるのは基本的に量的な変化である。そして単独の神殿に着目すれば、神殿の規模が大きくなったとしても想定される集団の規模が変化しない場合もあろ

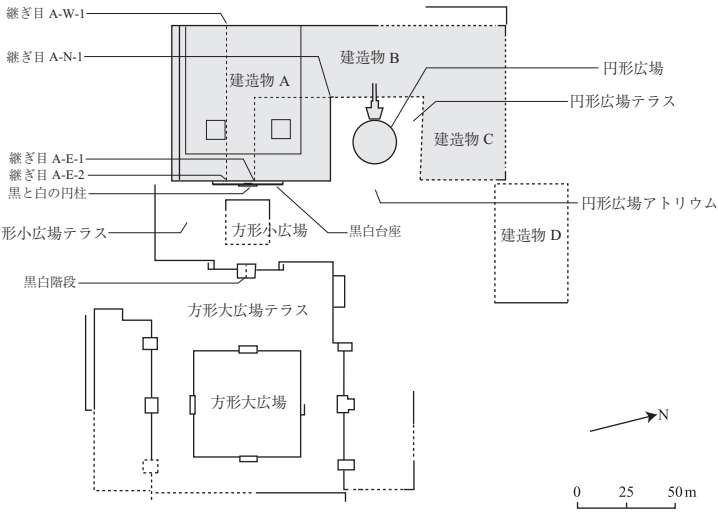

図３　チャビン・デ・ワンタル遺跡の平面図（渡部 2010）

う。しかし形成期早期から後期にかけて、アンデスの神殿は場所を変えて建設され続けた結果、神殿における物質文化の増大など複雑化の証拠が増大した。そのため、長期的に見ると量的変化に伴い、結果的に質的変化がもたらされたと言える。そして神殿が永遠に大規模化することはないため、ある時点で更新はストップし放棄された。アンデスの神殿は結果的に変質し、同じ状態を保つことはなかった。

いつから文明と呼ぶか、最初の文明社会の特徴は何かではなく、どのように文明の形が明確化したのか、その過程を考えるのが建設的である。文明は常に変化し続けるところに本質があり、いつから文明と呼ぶか、どのような状態かは、結果として判定され、研究の進展によって修正が加えられるであろう。着目すべきはコンテンツ自体ではなく、動きの仕組みである。

五　複雑化のメカニズム

古代アンデス文明の始まりの痕跡は、形成期早期まで辿ることができる。もちろん何らかの連続性ということであれば、ホモ・サピエンスの誕生まで遡るのであるが、重要なのはあくまで大規模化・複雑化のプロセスに繋がる動きが始まる契機が生じたのはいつかで

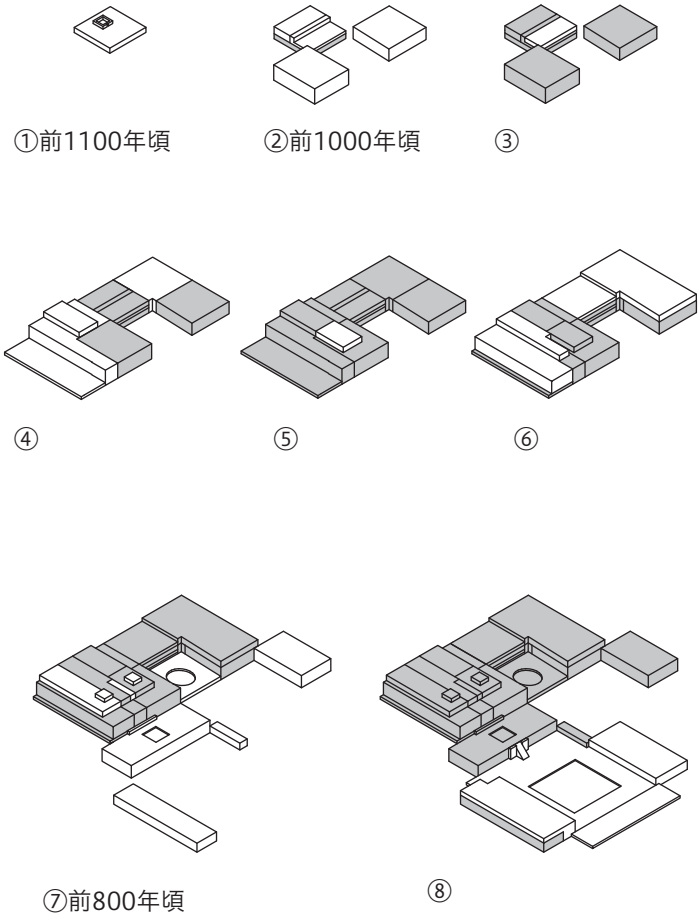

図４　チャビン・デ・ワンタル神殿の神殿更新
（Watanabe 2013; 宮野元太郎作図）。
色を塗った部分が既存の建物を，白色部分が新たに付け加えられた部分を示している。

ある。また、なぜ初期の建物を神殿と認定できるのかが問題ではない。はじめの時点では文明社会には見えないかもしれないが、そこから結果的に文明が誕生したという繋がりが重要である。

従来文明の起源として農耕牧畜の発展、それに基づく食料基盤、またそれを可能にする灌漑技術などが指摘されてきたが、食糧基盤は必要条件ではあるが十分条件ではない。つまり同様の条件を備えた地域は複数あったが、その全てで文明が始まったわけではない。アンデス最古の神殿は海岸地帯で確認されており、山地に神殿が建設され始めるのはそれよりも約五百年後である（Haas & Creamer 2006）。形成期早期の神殿では海産物の比重が高く、後に主食となるトウモロコシやジャガイモが大量に栽培されていた証拠はない。農耕による主な栽培作物はワタとヒョウタンであり、[1]それらは直接食糧とはならず漁撈のための網と浮きを作る材料であり、間接的に食糧獲得に関わるものである。農耕の主な目的が、直接的に食料を生産することではなく、漁撈のための道具などを製作する材料を栽培することであったという点が、先土器時代アンデスの農耕のねじれた特徴を示している。つまり農業の集約化に比例して、そのまま食料の生産量が増大するわけではない。また余剰生産物という概念が文明の誕生の鍵となるとされてきたが、海産物は穀類と比較して、保存には向かず、蓄積されにくい。海の幸は必要に応じてその都度獲得される。しかし人口を支える十分な食糧があるということは共通点である。

では余剰生産物という概念を用いずに文明の誕生をどのように説明するのか。余っているのは、むしろ食糧といったモノではなく、各人の労働力、時間である。それを汲み上げ統合する仕組みが文明形成には必要となる。これまで日本人研究者は「神殿更新」という概念で文明形成を説明してきた（加藤・関編　一九九八）。例えば大貫良夫は、「初めのうちは各集落単位での、ごく小規模の祭祀場の造り替えという習慣が、世代を超えて繰り返されるうちにしだいに規模が大きくなり、人口、食料生産、技術革新、思想の錬磨、儀礼の壮麗化などと相互に連関しあってポジティブ・フィードバックの動態ができあがる。つまり神殿更新なら社会発展の動因になり得ると考えられるのである」（大貫　二〇一〇：九六-九七）と

説明する。関雄二は「コトシュにさかのぼるような「神殿更新」は、ひとたび始まってしまうと、ひたすら巨大化へと向かい、その過程で必要な労働力、食料生産は増加せざるをえないのである。すなわち神殿によって支えられる社会も拡大を遂げたということになる」（関 一九九八：三〇五）と解釈する。しかし神殿更新という原動力を設定し、それに形成期社会発展のメカニズムを還元してしまうと議論はそこから先に進まない。何が神殿更新という習慣を始めさせ、継続させたのかを説明すべきである。神殿更新という概念の問題は例えば、社会変化を人口増加で説明し、なぜ人口増加が起こったのかを説明しない議論と類似している。議論を先に進めるため、関は神殿更新をしなければならなかった理由について、実践論を用いて説明を試みている（関 二〇一四a、二〇一四b、二〇一五）。神殿更新のメカニズムについては第八章で検討することとし、ここでは原動力としてではなく、「身体からの外在化」と「偶然性」に着目して神殿更新の特徴を説明したい。

信仰に関わる様々な儀礼があるが、シャーマンによる儀礼などは、個人の能力、身体に依存した儀礼と言える。そこに、大規模な変化が生じる契機を見いだすことは難しい。アンデスの事例では、神殿という人間の身体から外在化した物質が存在すること、そしてそれらが建て直されることで常に多くの人間からの関与を内包することが特徴である。しかもその建て直しは、伊勢神宮のように同じ大きさの木の建物を二十年に一回建て直すのではなく、同じ場所で、石や日乾しレンガの建物を内部に埋め込むことによって、大規模化に繋がった。物質を用いる儀礼が連続的に行われることが結果的に文明を産み出したと言える。西アジアのギョベクリ・テペなどでは、そうした連続性が担保されなかったのであろう。

神官の選出の仕組みも重要な点である。形成期の神官がどのように選ばれたのかについては、研究者で共通の意見があるわけではない。後の時代の事例を推定のための状況証拠として挙げれば、先スペイン期最後のインカ帝国では神官は世襲ではなく、選出された。[2] ただし血縁者を排除するということではなく、神官となる者は非血縁者でもかまわないと説明した方が正確である（アリアーガ 一九八四［一六二一］：四一六）。特に男の双子の片方が神官にふさわしいとされ（Cobo

1964 [1653]: 224)、チベット仏教のダライラマのように、神官となる者は幼い時に決定された（Anónimo 1968 [ca.1594]: 161–167）。

二つ目のポイントである「偶然性」は、必要条件が揃ったところで全て文明が生じたわけではなく、あくまで「結果的に」生じたという考えである。特に長い時間幅で見た際の結果として捉えることが重要である。当初、建物の建設を始めた人たちは建物が大きくなるということ、そしてそれに伴って様々な要素が取り込まれるということを予想していたわけではなかった。ローズマリー・ジョイスは中米のマヤ文化の類似した建築の事例を議論する際に「意図せざる結果（Unintended Consequences）」という言葉を用いている（Joyce 2004）。こうした現象は建物をある時点の状態としてではなく、ある時間幅で見ることで分かることであり、当事者たちは決して認識できなかったことである。神殿は、予め明確な設計図をもって計画的に建設されたものではなく、したがってそれを指揮した人々の権力の大きさを示すものでもない。その大きさを決める要因の一つはどれだけ長い期間に使用、更新されていたかであり、神殿の拡大はあくまで偶然の結果であった。

神殿の更新には物質性と場所性という要因も働いていた。アンデス形成期早期の神殿は木の建築ではなく石であったため、結果的に大規模化、複雑化にプラスに働いた。木の建築は腐食するため、更新するには材料を交換する必要がある。また場所を変えて建て直しが行われる場合、規模は増大しない。アンデスでも木など腐食しやすい素材で作られた儀礼用建物などがあったかもしれないが、それらは消えてほとんど痕跡を残さないか、残ったとしても大規模ではなく、腐食しにくい建築材が用いられていないため認識しにくいのである。アンデス形成期早期の神殿は、石という建築材を用い、かつ更新の際に前の建築を取り壊すことはせず、前の時代の建物を前提とし、それを覆う形で更新されたため、累積的な変化が生じたのである。

しかしなぜ同じ場所で神殿を建て直したのか。神という抽象的な存在を祀るための神殿であればどこにあっても良い。

先スペイン期アンデスの最終期のインカ帝国では、ワカ信仰が基本であった。ワカとは聖なる物体のことを指し、岩、泉、川の合流点など特定の場所が信仰の対象であった（渡部 二〇一七）。そして各共同体の祖先は特定のワカから出てきたと考えられていた。インカのモデルを援用すれば、アンデスの信仰は特定の場所に結びつき、その基本は祖先崇拝と言える。そのように考えると形成期の神殿をよく理解できる。建物の場所を動かすこと自体が想定されなかったのである。同じ場所で建て直し、かつ石という建築材を用いるということが結果的に累積的変化をもたらしたのである。

① そのため形成期早期を「先土器綿栽培時代（コットン・プレセラミック）」と呼ぶ研究者もいる（Burger 1992: 29; Pozorski & Pozorski 1987）。

② 仮にアンデス形成期の儀礼を司る神官が同様に、世襲制ではなく、選出制で決定されたのであれば、血縁よりも制度の方が優先されるという仕組みであり、身体から外在化していると説明できる。これはクロード・レヴィ＝ストロースの提唱したイエ社会という概念に繋がる（渡部 二〇一三）。つまり血縁が絶えたとしても、制度は維持される。そして神官選出制度を三〇〇〇年もの間、神殿を建設し続けた要因の一つとして指摘することができる。今後、神官の実態については神官と認定される人物の墓の人骨のＤＮＡ分析などから議論を進めることが必要であろう。

六　リチュアリティー

旧世界の古代文明では王、あるいは少数の政治的指導者が統治する国家社会が、文明初期から形成されたため、文明の誕生と国家成立はほぼ同時代の現象と認定される（Chapman 2007: 17; Yoffee 2005: 17）。しかしアンデス形成期の社会は国家と認定されない。かつてアンデス形成期の有名な遺跡チャビン・デ・ワンタルが国家であるという説が唱えられ（Carrión Cachot 1948）、現在でもルットゥ・シャディーのように、アンデス形成期のカラル遺跡を、都市と認定し、初期国家であると考える研究者はいる（Shady 2006）。しかし、多くの研究者は形成期の社会を国家とは考えず、遺跡を都市ではなく、神殿と考える（*cf.* マコフスキ 二〇一二）。都市は、政治的経済的要素が集約し多くの恒常的人口を抱える場であり、国家の成立と平行するという点では、アンデスの事例も同様で、都市は国家の成立と平行し、後一世紀以降にようやく現

れる。また、ノーマン・ヨフィーは都市化と農村化（ruralization）をセットとして説明するが（Yoffee 1997: 260; Yoffee *et al.* 1999: 269）、アンデスでの都市の場合、そのような特徴は顕著ではない。農村など集落自体が形成される傾向が弱く、住居は散在していた（マコフスキ 二〇一二）。またアンデスの都市は儀礼的要素が強く、儀礼的な建物が中心的な位置を占め、例えば、インカ帝国の首都クスコの中心部には太陽の神殿があった。

チャールズ・スタニッシュは形成期の社会を説明するのに首長制社会という概念を用いている（Stanish 2001）。リチャード・バーガー等はそれに異論を唱え、首長制社会は国家の前段階ではなく、それぞれ異なった軌跡であるというノーマン・ヨフィーの説を引用し（Yoffee 1993）、前一千年紀中頃のチャビン・デ・ワンタルなどの祭祀センターが、初期の小規模国家に類似していると述べる（Burger & Matos Mendieta 2002: 170–171）。このように形成期社会を説明するのに、首長制社会、あるいは国家というモデルを参照枠として用い、それとの類似性、あるいは相違点を記述するという方法がこれまでの標準的な方法であった。しかしアンデス形成期社会、とくに形成期早期の社会は既存の国家や首長制社会というモデルでは的確に記述できないと筆者は考える。

ではなぜアンデス形成期の社会が国家ではないと言えるのか。一般に国家の誕生には組織的な戦争が結びついていると説明される（*cf.* Carneiro 1970）。アンデス文明の形成期後期まではそうした証拠が皆無、つまり武器の発達や、防御壁の建設などの証拠がないのである。[①] また図像表現や墓などのデータも、形成期に王と呼べるような政治的指導者が欠如していることの論拠となっている。戦争の証拠が現れるのが形成期末期であり、多くの神殿はすでに放棄されている（例：チャンキーリョ遺跡：Ghezzi 2006）。国家が成立するのはその後である。国家形成に組織的戦争が関係するという点は、アンデスの事例と他の地域の国家の間で共通する。

アンデス文明の始まりの指標とされる神殿の登場は紀元前三〇〇〇年まで遡るのに対し、国家と認定される社会形態は早くとも紀元後の一世紀になるまで現れない。アンデス形成期の社会は文明だが国家ではなく、現在地球上で観察できる

社会とは異なった社会であったと考えられる[②]（加藤 一九九八：Yoffee 2001: 65）。そのため、観察できる事例から組み立てた既存のモデルでは的確に説明できない。国家でもなく、首長制社会でもない、大規模な神殿を有する形成期の社会とはどのような社会だったのか。筆者は以前の論文で、レヴィ＝ストロースの「イエ社会」を参考にして、「神殿社会」という概念を提唱したが（渡部 二〇一三）、今回は別の視点から説明を試みる。

そもそもなぜアンデス形成期の社会が否定形で説明されるのかというと、社会を記述する既存のモデルが、政治的特徴に着目した分類に基づいているからである。文化人類学における社会の分類は政体（polity）としての分類であり、それに従って国家、首長制社会、部族社会などのタイプが設定された（サーヴィス 一九七七［一九七一］、一九七九［一九七一］）。アンデス考古学においては、文化人類学で設定された国家、首長制社会の定義がおおむね踏襲され、使用されている。それによれば、首長制社会は世襲的な階層的地位が認められるが、公的な抑圧装置が欠如しており、また再分配経済が一般的な社会形態である。一方、国家は武力装置を伴う高度に制度化された階層化社会である。

アンデス形成期における政治的特徴よりも宗教的、儀礼的特徴が顕著に認められる社会を記述するため、ここでは議論の手がかりとしてリチュアリティー（rituality）という概念に着目したい。これはもともと北米大陸南西部のホホカム文化、アナサジ文化（チャコ文化）の社会を、北米大陸東部の政治的側面の強い首長制社会と対峙させ比較するため、ロバート・ドレナンが提唱した概念である（Drennan 1999）。ドレナンは、コミュナリティー（Communality）という概念との類似性、あるいはコリン・レンフリューのいう「集団志向首長制社会（group-oriented chiefdom）」（Renfrew 1974）という概念との平行性を指摘し、個人が突出しない、社会的紐帯の重要な社会を表す概念としてリチュアリティーを用いている。その後、ヨフィーがこの用語を援用したが（Yoffee 2001, 2005）、他の研究者はあまり積極的に使用していない。

筆者はリチュアリティーという概念がアンデス形成期社会に関する見方を整理するのに有効であると考える。ヨフィーはリチュアリティーを国家や首長制社会とは違った社会変化の道筋に位置づけている（Yoffee 2005: 178）。形成期社会にお

いて儀礼的な部分は、政治的統合体に付随する特徴としてあるわけではなく、社会的紐帯の一義的な部分である。形成期中期以降、神官の証拠が明確化し、彼らはある種のリーダーシップを発揮していたと想定できるが、それを正当化するのは、経済的成功、他者への支配ではなく、各種の技能、儀礼的知識などであったと考えられる（*cf.* Souvatzi 2007: 47）。神殿で神官が儀礼を司る際に依拠するのは、トップダウンの権力ではなく、人々から力を汲み上げる技能、儀礼的知識、換言すればボトムアップの社会的力を操作する能力であったと想定される。

注意したいのは、リチュアリティーがポリティー（政体）と対置される概念ではないということである。[③] ここではドレナンの議論を発展的に継承し、ポリティーとリチュアリティーを社会の互いに異なる側面、社会の二つのレイヤーと表現し、どちらの要素がより強いかで、社会の特徴を示してみたい（図5・図6）。ただし二つのレイヤーが互いにきれいに分かれるわけではなく、あくまで見方を整理するためのモデルである。アンデス形成期社会やチャコ社会などでは、リチュアリティーの単位は幅広く色濃く認められ、その一方でポリティーの枠組みはより狭く薄い（図5）。国家成立以降の社会では、ポリティーとしてのまとまりが強くなり、リチュアリティーの枠組みは相対的に小さくなる（図6）。そしてアンデスの場合、巨大なポリティーの中に複数のリチュアリティーがあるという極端な例が、インカ帝国である。インカ帝国は政治組織としては一つであるが、その内部に文化的民族的宗教的多様性が認められ、支配下の民族集団がそれぞれ信仰するワカを有し、インカ王族の太陽信仰と併存した。アンデス形成期社会の場合は帝国とは逆に儀礼的側面がより強く、リチュアリティーの範囲の中により小さなポリティーが複数存在すると解釈したほうが分かりやすい。神殿に対応する集落が形成されるわけではなく、神殿の周りに分散して生活していた人々が神殿に集まってくる。その規模はせいぜい複数の世帯単位であったと想定される。そのため集落が確認できず、神殿以外の場所でどのような活動をしていたかがよく分からないのである。

図５　形成期の神殿社会の模式図

丸がリチュアリティーの単位、四角がポリティーの単位である。基盤となるリチュアリティーのレイヤーを下に配置し、ポリティーのレイヤーを上に示している。丸の濃度を濃くしている。ポリティーとリチュアリティーの間の相互浸透性をレイヤーの不透明度などで示すことにより、モデルを改良できるであろう。

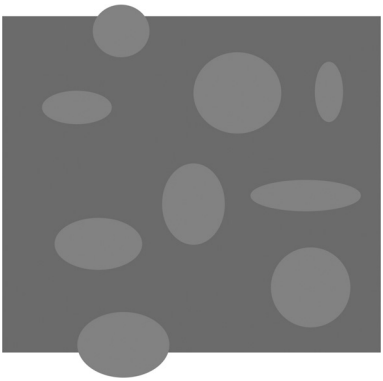

図６　国家社会の模式図

四角がポリティーの単位、丸がリチュアリティーの単位である。基盤となるポリティーのレイヤーを下に配置し、リチュアリティーのレイヤーを上に示している。四角の濃度を濃くしている。四角からはみ出す丸があるのは、リチュアリティーが複数の国家にまたがることがあることを示している。

① 大貫は形成期における武力の証拠の欠如、希薄さについて次のように述べている。「しかしながら、その政治のシステムはあくまでも神殿の神官たちが主導権を握るもので、宗教的権威がその力の源泉であった。また、一部の住民が神官の権威の体制から離脱しようとした場合、これを阻止する物理的な力を神官たちは持ちあわせていなかった。このような形成期社会最後の形態はまもなく限界に達する。そして強い物理的な強制力を握る別の政治体系がその限界を突破していく。その時代が形成期のつぎに来る地方発展期であり、国家という政治のシステムが確立するのである」（大貫他 一九九八：一二〇－一二一）。

② 加藤泰建は「問題にしている形成期とは、いまだ王国という社会体制が生まれる以前の時代であり、それは再び繰り返されることのない歴史の一過程である。形成期の社会とは、おそらく現在の地球上にみられるさまざまな社会のどれとも異なった社会であり、もはや直接観察することはできない社会であるからこそ、あえて考古学資料を基にして解明する価値がある」（加藤 一九九八：三四－三五）と述べている。

③ ティモシー・ポケタットは、儀礼が本質主義的に、つまりそれが政治的要素を含まないかのように取り扱われる傾向を指摘している（Pauketat 2007: 77）。

七 リチュアル・エコノミー

形成期の社会の特徴をリチュアリティーという概念を導入して整理することを提案した。次に、神殿での活動のメカニズムを説明するために、リチュアル・エコノミーという概念に注目したい（McAnany & Wells 2008; 渡部二〇一七：六一；Wells 2006; Wells & Davis-Salazar 2007）。儀礼は政治的にも宗教的にも行われるため、より限定的に使用するのであれば宗教的儀礼に関わる経済と言える（*cf.* ベル 二〇一七［二〇〇九］；Wells 2006: 284）。それはリチュアリティー概念の延長ではなく別の文脈で、北米ではなくメソアメリカ考古学で主に用いられてきた。また人類学でもアジアで主に用いられている（Hardenberg [ed.] 2017）。ポリティーに対しリチュアリティーという概念が対置されるのではなく、両者が社会の異なった側面を示すのと同様、リチュアル・エコノミーは、これまで頻繁に使用されてきたポリティカル・エコノミーやエイジェンシーに着目した議論の幅を広げるために導入された、問題発見的な役割を担う概念である。ポリティカル・エコノミーという見方で、経済の動きを政治的な側面から捉えることは、現代、あるいは過去の国家社会ではかなりの程度でき

るであろう。[1] しかしながら、アンデス形成期の社会には応用しにくい。神殿を中心とした社会的紐帯を政治的まとまりと想定することが難しいためである。

クリスチャン・ウェルズはリチュアル・エコノミーという概念を、「獲得、消費によって意味を操作し解釈に形を与え、社会的にせめぎ合う価値観や信仰を物質化することに関する理論的構成」と定義している（Wells 2006: 284）。リチュアル・エコノミーは経済の一つのタイプではなく一つの見方であり、マクロな、制度的な、構造的な動きを説明する枠組みである（Wells & Davis-Salazar 2007: 3）。世界観や信仰が物質文化に体現されるあり方を説明するリチュアル・エコノミーは、非常に示唆に富む（Wells 2006: 285）。ウェルズ等は主にメソアメリカの国家社会で、つまりポリティーという枠組みで、リチュアル・エコノミーを援用し議論したが、アンデス形成期に応用するためには、見方をもう少し整理する必要がある。アンデス形成期はそもそもポリティーの枠組みが明瞭ではないため、ポリティカルな部分の補足としてではなく、反対に、リチュアルな部分を一義的に見るべきである。

ロイ・ラパポートに従えば、形式が定まった行為や発話が儀礼であり、意味を問うているのではない（Rappaport 1999: 24）。リチュアル・エコノミーが着目するのは、形式が定まった行為である儀礼を通じて、集団の価値観、モラル、理想がせめぎ合い、物質化されるプロセスである（Wells 2006: 284）。ヨフィーはリチュアリティー概念を記述する中で、政治と経済の要素が儀礼に埋め込まれている関係性について触れ（Yoffee 2005: 173）、政治や経済の特徴よりも儀礼が優先する具体例として、クリフォード・ギアツの『ヌガラ』の次の一節を引用する（Yoffee 2001: 67）。

「この国家が常に目指したのは演出であり儀式であり、バリ文化の執着する社会的不平等と地位の誇りを公に演劇化することであった。（中略）これらの儀礼はそれ自体が目的であり、そのために国家があった。宮廷の儀礼主義が宮廷政治の推進力であった。集団儀礼は国家の基礎を固めるための仕掛けではなく、むしろ国家が、その今はの際においてさえ、集団儀礼上演のための仕掛けなのであった。祭儀が権力に仕えたのではなく、権力が祭儀に仕えたのである」（ギアツ 一九九〇［一九八〇］：一二－一三）。

日本のアンデス研究者も儀礼的側面を経済的側面よりも優先させて、形成期の神殿を中心とした社会の特徴を解釈した（加藤・関編 一九九八）。他のアンデス考古学者では、マシュー・ピシテリが、リチュアル・エコノミーという言葉を直接用いてはいないが、ウェルズ等と同様の考え方を開陳している（Piscitelli 2014, 2017）。ピシテリは祭祀的な活動を中心的に捉え、リーダーが神殿を建設するのに人々を納得させ、必要な労働力を動員し物資を獲得する仕組みを説明する（Piscitelli 2017: 408）。また、個人あるいは少数の集団をリーダーとして想定し、海岸線よりも内陸に入った地域での農業の開始が、海岸地帯からの労働力を引き込むという、農業中心的な従来のチャイルド的なモデルに回帰するようなジョナサン・ハース等の解釈（Haas & Creamer 2012）を好意的に評価する（Piscitelli 2017: 404）。

ウェルズの説明では物質化という考えがリチュアル・エコノミーのメカニズムの説明に用いられるが、ピシテリの説明ではむしろ結果と想定されている。建造物の大きさが、指揮した人々の強さ、権力、偉大さを示し、建造物はあくまで権力の一つの表れであるとする（Piscitelli 2017: 405）。この解釈は、神殿は結果ではなく、それこそが社会の大規模化複雑化に繋がる媒体となったとする考えとは異なる。神殿の大きさは投入された累積的な労働力を示すが、あくまで長期間にわたる更新の結果であり、個人の権力に比例するわけではない。

リチュアル・エコノミーという概念は、人間を直接観察できる現代の事例であれば、より汎用性が高いが、物質化のメカニズムを扱うため、過去の社会を対象とする場合でも用いることは可能である。特にアンデスでは物質は政治的側面よりも儀礼に密接に結びついていたため応用しやすい。アンデスの最終期に出現したインカ帝国では、物質はカマイ（*camay*）という概念で捉えられる（渡部 二〇一七）。物質は人間がコントロールする対象ではなく、物質そのものに変化の方向性が内在しているという考え方である。そのため、人間は物質に予め備わった力に働きかけるだけである。カマイが神殿を更新する過程で生み出された後付けの概念なのか、はじめからあって神殿建設のきっかけとなったかは判定できないが、重要なのは物質と儀礼が組み合わさって複雑化に繋がっていったという事実である。

儀礼と物質が結びつくのがアンデスの特徴であり、儀礼的側面が政治的側面よりも先行して文明形成が進んだ。神殿が大規模化し、それを通じ複雑化も進んだ。しばしばアンデスの特徴として、はじめに神殿ありき、と説明される（泉 一九六六）。しかし政治と宗教のどちらが先に発達したのかが問題なのではなく、それはあくまで結果である。仮に物質が政治的側面と結びついたのであれば、政治的統合がより早く進んだと考えられる。ただしメソポタミアなどでも儀礼的側面が先に明確化したようである（Pauketat 2007: 188）。複数の文明間で共通するのであれば、儀礼を中心に据えた、より精緻なモデル構築が可能となろう。

ウェルズはリチュアル・エコノミーという概念を物質化と結びつけて定義しているが、大規模化、複雑化の議論に繋げるためにはもう一工夫必要である。なぜなら、神殿の更新によって建造物が大規模化することは明白だが、なぜ神殿の更新に伴い累積的に増加する、神殿での活動のために必要な労働力が動員されることが可能になったのか、そのメカニズムについては説明されていないからである。人々の間の差異化の証拠はあくまで結果として現れたのであり、神殿建設の始まり、継続を少数の集団のリーダーシップに解決を求める事は難しい。

先に大貫（二〇一〇：九六–九七）と関（一九九八：三〇五）の神殿更新を社会変化の原動力と捉える考えを紹介した。関は議論をさらに展開し、神殿を更新しなければならなかった理由を、実践論を用いて説明する（関二〇一四a、二〇一四b）。世界の祭りのような定期的に行われる事例を知っていれば、祭りや儀礼が繰り返される過程で慣習化することは理解できるだろう。ではなぜ増加する必要な労働力をまかなうことができたのか。ここでは関の議論を踏襲しつつ、累積的に増加する労働力を動員するメカニズムを説明するために、議論の方向性を示したい。そのヒントとして、協同と集合行為という概念に着目する。ピシテリもこれらの概念に言及し、議論のさらなる方向性を示唆している（Piscitelli 2017: 408）。

① マイケル・スミスは、ティモシー・アール等のポリティカル・エコノミーをドメスティック・エコノミーと対置させる使用法に異を唱えている（Smith 2004: 78）。

八　協同と集合行為

文化人類学の分野でマーガレット・ミード編集による『未開の人々の協同と競争』（Mead [ed.] 1937）という本が出版され、協同（cooperation）と競争（competition）を対置する枠組みが示された。考古学でも協同や集合行為（collective action）という概念が援用され、主に文化進化を説明する枠組みで使用されている（Carballo [ed.] 2013; Carballo *et al.* 2014）。社会学では協同は次のように説明される。「複数の個人や集団が、行為を調整しあって共通目標を達成する相互行為の過程や関係。一般には意識的な営みをさすが、広義には各人が自己利益のために行動しながら客観的には共有しうる効果が生れるような行動や関係をも協同に含める」（合原　一九九四）。考古学でもほぼ同様の意味で用いられているが、デイヴィッド・カルバージョ等はさらに踏み込み、協同を、利益のために他の人とともにコストをかけリスクを冒す行為と説明する（Carballo *et al.*: 2014: 100）。

協同が集団での行動に着目するのに対し、競争は個人が突出していく過程を記述するのに用いられる（Mead [ed.] 1937）。競争という概念は、政治体、階層性の議論をするのにしばしば用いられ、従来の、余剰生産物の蓄積から、少数の支配者が突出する過程を説明する枠組みとほぼ平行する。一方で、リチュアリティーとしての性格が強いアンデス形成期の社会における神殿更新を議論する際には、個人間、集団間の競争よりも、協同の概念と親和性が高いと思われる。これは特に、競合や個人のリーダーシップの証拠が希薄な、形成期早期・前期の神殿の場合に言える。ただし形成期の神殿を中心とした社会に競争がないというわけではなく、相対的にその程度が低いと想定できるということである。神殿を構成する人々内部での動きよりも、神殿間の関係性、例えば他の神殿を意識した、それらとは異なる特徴、独自性を出そうとするような動きなどを説明する場合、競争という概念を有効に活用できるであろう。実際、神殿間の競合、神官のリーダーシップという議論もあり、それらは特に形成期後期以降を対象とする場合に有効である。[①] 筆者は神殿社会の進展の結果、特定の

神官集団が突出したのであり、人々の間の競争自体は早期の神殿更新を推し進める原動力ではなかったと考えている。

経済学の分野で使用され始めた「集合行為」（オルソン 一九八三［一九六五］）は、政治学や社会学にも応用され、その後考古学でも用いられるようになった。マンサー・オルソンは、集合行為の特徴を次のように説明する。協力によって共通の利益が得られる場合に集団での行為に参加し組織を形成すると想定される。しかし共通の目標があれば、自然に集団を形成し増大するわけではなく、大規模になればなるほど集団の目標は実現されにくくなる傾向にあり、集団の規模は頭打ちになる。組織が大規模になる場合、楽をして利益を得ようとする者（フリーライダー）が出てくるため、強制がない場合は組織を維持できない（*cf.* Carballo *et al.*: 2014: 100）。

考古学では、集合行為と協同は、なぜ人々が集まり、共に行動し社会関係の基盤を築くかを説明する概念として、特に複雑社会の変化を論じるために、文化進化論の枠組みの中で検討された（Carballo [ed.] 2013）。そして協同が主に小規模な集団を対象としたのに対し、集合行為は大規模集団を扱うという傾向の違いがある（Carballo *et al.* 2014: 101）。本来、経済学の分野では、経済的な組織が対象とされるが、アンデス形成期の神殿を中心としたリチュアリティーを解釈する際には、組織の主構成原理を経済的要因以外に設定する必要がある。また、集団が大規模になった時にフリーライダーが出現するとオルソンは想定するが、形成期のリチュアリティーは、労働して利益を得るのではなく、むしろ神殿での活動自体が利益となるような仕組み、集団の目的と個人の目的が一致するような仕組みであるため、そうしたフリーライダーが出現することが想定されない（*cf.* 丹辺 二〇〇六：二〇六）。

アンデス形成期のリチュアリティーの規模には限界があり、例えばアンデス形成期後期の大神殿であるチャビン・デ・ワンタルでの人口は二〇〇〇－三〇〇〇人と見積もられている（Burger 1992: 168）。たとえば人口一万以上の規模の国家社会をまとめ上げるには、協同や集合行為というメカニズムのみでは不可能であり、それを乗り越えるためには、強制力、競争が必要となることはアンデスの事例でも同様である。したがって、神殿を中心とした社会を対象とする議論では、強

制力や権力を媒介しないで集団の規模が、最大でおそらく三〇〇〇人程度まで、どのように増大するかが問題となる。形成期早期から前期までは神官の実態がよく分からず、その姿が明確になり始めるのは形成期中期以降である。神殿での活動は、リーダーによる指揮に従って行われる行為というよりも、信仰に従った人々の自発性に基づく行為と見られる。

協同と集合行為は、そもそも政治経済組織を対象として用いられ、政治的アクターの存在を前提とする概念であったため、政治的枠組みの脆弱なアンデス形成期に、そのまま応用することは難しい。カルバージョ等はメキシコ高原を事例として、協同や集合行為という概念を用いて農業、水利と社会との関係を議論している（Carballo *et al.* 2014）。アンデス形成期の神殿を対象とする場合、儀礼活動を通した大規模化、複雑化という性格に着目する必要がある。

協同や集合行為という考え方を考古学で用いるためには物質的な手がかりが必要である。アンデス形成期を理解するためには、物質である神殿の建設、更新、神殿における儀礼という行為を示すデータと、協同・集合行為という概念を接合することが有効である。具体的には、一回あたりの神殿の更新に関わる労働力、そして更新の頻度を調べることにより、集団の規模がどれだけ増大したかを推定できる。そして神殿の規模だけでなく、社会集団の規模が増大し、そしてそれに伴い、社会間関係が活発化する様相をモデル化する必要がある。アンデスでは農業は、むしろ神殿活動に付随して活発化していったと考えられ、例えば、トウモロコシの証拠が増加するのは形成期中期以降である（Ikehara *et al.* 2013）。そしてトウモロコシ製の酒の醸造に伴い、神殿活動の活発化が進んだと想定できる。つまり、農業そのものは社会変化の基本となる要素ではなく、神殿をめぐる活動の一要素なのである。このことは、形成期早期から栽培されてきたワタを用いた織物製作や、形成期前期から始まった土器製作についても言える。さらには形成期中期から明確になる、副葬品を伴う人物の墓も、儀礼のバリエーションの一つとして捉えることができる。以上のような神殿での活動のレパートリーの増加と、神殿の活動に関わる人々の数の増加を関連づけることが今後の議論の手がかりとなる。

クントゥル・ワシ遺跡の形成期後期初めの墓では千キロ以上離れたボリビアに原産地のあるソーダライト（方ソーダ石）

なども出土している（Kato 2014: 168）。こうした単一遺跡に認められる物資の原産地の範囲の拡大などが、諸神殿間の関係性をモデル化するための物質的証拠となる。神殿間の共通性や相違性を整理するためには、形成期早期では建築の設計が主な手がかりだが、土器製作が始まる形成期前期以降では扱える証拠が増えるため議論しやすい。神殿建設の始まりの時期では、協同性がどのように強化されるかという分析が有効であろうが、その更新のプロセスで、いかに競争の特徴が顕著になっていくかにも着目すべきである。特に形成期中期以降を扱う場合には、個別の神殿を支える諸集団間の関係、諸神殿間の関係を、競争にも着目し、協同と競争が変化の両輪として機能するあり方をモデル化することが有効であろう。

一方、考古学的データのみでは議論には限界があるので、限られたデータを最大限解釈するためには、民族誌的な事例に基づく演繹的な推論も必要となる。その際に鍵となるのは、人々の自発性を汲み上げ、協同性を生み出し、促進させる儀礼のポジティブな側面である。パフォーマンス、饗宴、など儀礼に関連する概念を整理し、それらを協同、集合行為と結びつける作業が必要である。儀礼遂行のための物質的な基盤が累積的に増大し、集団規模が増大することを示す状況証拠を整理することなどが課題である。

① 特に有名なのは、クントゥル・ワシ神殿に前八〇〇年頃埋葬された四基の墓である。それは中央基壇の下に埋め込まれており、新しい神殿の建立の際に行われた一種の儀礼である。黄金製品をはじめとする豪華な副葬品を伴っていることからバーガーは、埋葬は儀礼であり現実の社会を反映しているとは限らない、という留保をつけているが、これらの墓が「階層社会におけるエリートの埋葬」（Burger 1992: 206）である可能性を指摘する。関もそれらが神官集団であり、社会階層の萌芽と解釈する（関 二〇〇六）。

九　おわりに

アンデス文明は国家なしで成立したが、その後、結果として国家が成立した。つまり、時間差はあるものの国家は文明の要素として加わることとなり、世界中の人々が国家に組み込まれていくこととなった。かつてあった国家なき文明社会は地球上からなくなり、そのためそうした社会を理解するのが難しいのである。現在存在しないタイプの社会であるから

こそあえて発掘調査をして、過去の社会を掘り起こす必要がある。それは人類史を理解するための、重要なピースであり、人間そのものの本質を理解する試みである。本論文では、政治組織に着目した社会のタイプの分類では、アンデス形成期の社会を適切に捉えることができないこと、そしてリチュアリティーという概念が議論を進めるために有効であることを示した。また、アンデス形成期の社会の仕組みを説明するために、リチュアル・エコノミー、協同、集合行為という諸概念を用いた。しかし、いずれも政治組織が明確な対象を研究するためにこれまで用いられてきており、形成期社会の分析に利用するには工夫が必要である。

今後の課題として、リチュアリティーをいくつかのタイプに分類することが挙げられる。例えば、チャコ社会のようにその後国家に移行しなかった地域のケースと、アンデスのように国家社会が成立した場合を峻別する必要があろう。そのためにはリチュアリティーの中に、ポリティカルな要素が強化される萌芽がどのように認められるかに着目することが有効であろう。西アジアでのウバイド期でも、儀礼的枠組みの中で政治的側面が強化されるという同様の特徴が指摘されている（Pollock 1999: 91）。文明の変容をモデル化することも今後の課題であり、アンデスにおける国家形成については稿を改めて論じたい。[①]

① アンデスでは形成期後期の大神殿があったところに国家は成立せず、逆に神殿の建設を早々と停止したところに国家は出現しており、神殿社会から国家への移行には不連続性が認められる（渡部二〇一六）。

引用文献

Anónimo　1968 [ca.1594]　Relación de las costumbres antiguas de los naturales del Perú. In *Crónicas Peruanas de Interés Indígena*, edited by F. Esteve Barba, pp. 151-189. Biblioteca de Autores Españoles, Tomo 209. Ediciones Atlas, Madrid.

アリアーガ　一九八四［一六二二］「ピルーにおける偶像崇拝の根絶」（増田義郎訳）、『ペルー王国史』、三六三-六〇六頁、大航海時代叢書第Ⅱ期16、岩波書店。

ベル、キャサリン　二〇一七［二〇〇九］『儀礼学概論』（木村敏明・早川敦訳）、仏教出版。

Burger, Richard L.　1992　*Chavín and the Origins of Andean Civilization*. Thames & Hudson, London.

Burger, Richard L. and Ramiro Matos Mendieta　2002　Atalla: A Center on the Periphery of the Chavín Horizon. *Latin American Antiquity* 13 (2): 153–177.

Burger, Richard L. and Lucy C. Salazar　2012　Monumental Public Complexes and Agricultural Expansion on Peru's Central Coast during the Second Millennium BC. In *Early New World Monumentality*, edited by R. L. Burger and R. M. Rosenswig, pp. 399–430. University Press of Florida, Gainesville.

Carballo, David M. (editor)　2013　*Cooperation & Collective Action: Archaeological Perspectives*. University Press of Colorado, Boulder.

Carballo, David M., Paul Roscoe and Gary M. Feinman　2014　Cooperation and Collective Action in the Cultural Evolution of Complex Societies. *Journal of Archaeological Method and Theory* 21: 98–133.

Carneiro, Robert L.　1970　A Theory of the Origin of the State. *Science* 169: 733–738.

Carrión Cachot, Rebeca　1948　La Cultura Chavín. Dos nuevas colonias: Kuntur Wasi y Ancón. *Revista del Museo Nacional de Antropología y Arqueología* 2(1): 99–172.

Chapman, Robert　2007　Evolution, Complexity and the State. In *Socialising Complexity: Structure, Interaction and Power in Archaeological Discourse*, edited by S. Kohring and S. Wynne-Jones, pp. 13–28. Oxbow Books, Oxford.

チャイルド、ゴードン　一九五七［一九三六］　『文明の起源』（ねずまさし訳）、改訂版、岩波書店。

Cobo, Bernabé　1964[1653]　*Historia del Nuevo Mundo*. Biblioteca de Autores Españoles, Tomos 91–92. Ediciones Atlas, Madrid.

Crumley, Carole L.　1987　A Dialectical Critique of Hierarchy. In *Power Relations and State Formation*, edited by T. C. Patterson and C. W. Gailey, pp. 155–169. Sheffield Publishing Company, Salem.

1995　Heterarchy and the Analysis of Complex Societies. In *Heterarchy and the Analysis of Complex Societies*, edited by R. M. Ehrenreich and J. E. Levy, pp. 1–6. Archeological Papers of the American Anthropological Association No. 6. American Anthropological Association, Washington, D.C.

Drennan, Robert D.　1999　Analytical Scales, Building Blocks, and Comparisons. In *Great Towns and Regional Polities in the Prehistoric American Southwest and Southeast*, edited by J. E. Neitzel, pp. 255–259. University of New Mexico Press, Albuquerque.

Flannery, Kent V.　1972　The Cultural Evolution of Civilizations. *Annual Review of Ecology and Systematics* 3: 399–426.

Fuchs, Peter R., Renate Patzschke, Claudia Schmits, Germán Yenque and Jesús Briceño　2008　Investigaciones arqueológicas en el sitio de Sechín Bajo, Casma. *Boletín de Arqueología PUCP* 10 [2006]: 111–135.

Fuchs, Peter R., Renate Patzschke, Germán Yenque and Jesús Briceño　2010　Del Arcaico Tardío al Formativo Temprano: las investigaciones en

Sechin Bajo, valle de Casma. *Boletin de Arqueologia PUCP* 13 [2009]: 55–86.
ギアツ、クリフォード　一九九〇［一九八〇］『ヌガラ――一九世紀バリの劇場国家』（小泉潤二訳）、みすず書房。
Ghezzi, Ivan　2006　Religious Warfare at Chankillo. In *Andean Archaeology III: North and South*, edited by W. H. Isbell and H. I. Silverman, pp. 67–84. Springer, New York.
合原弘子一九九四　「協同」、『社会学事典』（見田宗介・栗原彬・田中義久編）、二一〇頁、弘文堂。
Haas, Jonathan and Winifred Creamer　2006 Crucible of Andean Civilization: The Peruvian Coast from 3000 to 1800 BC. *Current Anthropology* 47 (5): 745–775.
2012　Why Do People Build Monuments?: Late Archaic Platform Mounds in the Norte Chico. In *Early New World Monumentality*, edited by R. L. Burger and R. M. Rosenswig, pp. 289–312. University Press of Florida, Gainesville.
Hardenberg, Roland (editor)　2017　*Approaching Ritual Economy: Socio-Cosmic Fields in Globalised Contexts*. Universität Tübingen, Tübingen.
Ikehara, Hugo, Fiorella Paipay and Koichiro Shibata　2013　Feasting with Zea Mays in the Middle and Late Formative North Coast of Peru. *Latin American Antiquity* 24(2): 217–231.
泉靖一　一九六六　「初めに神殿ありき――無土器時代に農業も」、『朝日新聞』、九月二十一日夕刊、五頁。
Izumi, Seiichi and Toshihiko Sono (editors)　1963　*Excavations at Kotosh, Peru, 1960*. Kadokawa-Shoten, Tokyo.
Izumi, Seiichi and Kazuo Terada (editors)　1972　*Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. University of Tokyo Press, Tokyo.
Jennings, Justin　2016　*Killing Civilization: A Reassessment of Early Urbanism and Its Consequences*. University of New Mexico Press, Albuquerque.
Joyce, Rosemary A.　2004　Unintended Consequences? Monumentality as a Novel Experience in Formative Mesoamerica. *Journal of Archaeological Method and Theory* 11(1): 5–29.
加藤泰建　一九九八　「アンデス文明の起源を求めて」、『文明の創造力――古代アンデスの神殿と社会』（加藤泰建・関雄二編）、七－四二頁、角川書店。
Kato, Yasutake　2014　Kuntur Wasi: un centro ceremonial del Periodo Formativo Tardío. In *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*, edited by Y. Seki. pp. 159–174. Senri Ethnological Studies 89. Museo Nacional de Etnología, Osaka.
加藤泰建・関雄二編　一九九八　『文明の創造力――古代アンデスの神殿と社会』、角川書店。
Kohring, Sheila and Stephanie Wynne-Jones (editors)　2007　*Socialising Complexity: Structure, Interaction and Power in Archaeological Discourse*. Oxbow Books, Oxford.
マコフスキ、クリストフ　二〇一二　「都市と祭祀センター――アンデスにおける都市化ついての概念的挑戦」（渡部森哉訳）、『年報人類学研究』、

二号、一－六六頁。
McAnany, Patricia A. and E. Christian Wells　2008　Toward a Theory of Ritual Economy. In *Dimensions of Ritual Economy*, edited by E. C. Wells and P. A. McAnany, pp. 1–16. Research in Economic Anthropology Volume 27. JAI Press, Bingley.
McGuire, Randall H.　1983　Breaking down Cultural Complexity: Inequality and Heterogeneity. *Advances in Archaeological Method and Theory* 6: 91–142.
Mead, Margaret (editor)　1937　*Cooperation and Competition among Primitive Peoples*. McGraw-Hill, New York.
三宅裕　二〇一五　「西アジアにおける神殿の出現――新石器時代の公共建造物をめぐって」、『古代文明アンデスと西アジア――神殿と権力の生成』（関雄二編）、四一－八六頁、朝日新聞出版。
丹辺宣彦　二〇〇六　『社会階層と集団形成の変容――集合行為と「物象化」のメカニズム』、東信堂。
オルソン、マンサー　一九八三［一九六五］　『集合行為論――公共財と集団理論』（依田博・森脇俊雅訳）、ミネルヴァ書房。
大貫良夫　一九九一　「先史学から見た未開と文明」、『未開の概念再検討Ⅱ』（川田順造編）、三一－四八頁、リブロポート。
一九九八　「交差した手の神殿」、『文明の創造力――古代アンデスの神殿と社会』（加藤泰建・関雄二編）、四三－九四頁、角川書店。
二〇一〇　「アンデス文明形成期研究の五〇年」、『古代アンデス――神殿から始まる文明』（大貫良夫・加藤泰建・関雄二編）、五五－一〇三頁、朝日新聞出版。
大貫良夫・前川和也・渡辺和子・屋形禎亮　一九九八　『人類の起原と古代オリエント』、中央公論新社。
Pauketat, Timothy R.　2007　*Chiefdoms and Other Archaeological Delusions*. AltaMira Press, Lanham.
Pisciteli, Matthew　2014　Ritual is Power?: Late Archaic Small-Scale Ceremonial Architecture in the Central Andes. Ph.D. Dissertation, Graduate College University of Illinois at Chicago. Chicago.
2017　Pathways to Social Complexity in the Norte Chico Region of Peru. In *Feast, Famine or Fighting?: Multiple Pathways to Social Complexity*, edited by R. J. Chacon and R. G. Mendoza, pp. 393–415. Springer, Cham.
Pollock, Susan　1999　*Ancient Mesopotamia: The Eden That Never Was*. Cambridge University Press, Cambridge.
Pozorski, Shelia and Thomas Pozorski　1987　*Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*. University of Iowa Press, Iowa City.
Rappaport, Roy A.　1999　*Ritual and Religion in the Making of Humanity*. Cambridge University Press, Cambridge.
Renfrew, Colin　1974　Beyond a Subsistence Economy: the Evolution of Social Organization in Prehistoric Europe. In *Reconstructing Complex Societies: An Archaeological Colloquium*, edited by C. B. Morre, pp. 69–95. Bulletin of the American School of Oriental Research No.20, Chicago.
Schmidt, Klaus　2009　Göbekli Tepe: santuarios de la Edad de Piedra en la Alta Mesopotamia. *Boletin de Arqueologia PUCP* 11 [2007]: 263–287.
関雄二　一九九八　「文明の創造力」、『文明の創造力――古代アンデスの神殿と社会』（加藤泰建・関雄二編）、二九七－三一一頁、角川書店。

二〇〇六　『古代アンデス――権力の考古学』、京都大学学術出版会。
二〇一四 a　「古代アンデス文明におけるモニュメントと社会」、『古墳時代の考古学九――二十一世紀の古墳時代像』（市瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編）、一九二－二二〇頁、同成社。
二〇一四 b　「古代アンデスにおける神殿の「はじまり」――モノをつくりモノに縛られる人々」、『「はじまり」を探る』（池内了編）、一二七－一四〇頁、東京大学出版会。
二〇一五　「古代アンデスにおける神殿の登場と権力の発生」、『古代文明アンデスと西アジア――神殿と権力の生成』（関雄二編）、一二五－一六六頁、朝日新聞出版。
サーヴィス、エルマン　一九七七［一九七二］　『文化進化論――理論と応用』（松園万亀雄・小川正恭訳）、社会思想社。
一九七九［一九七二］　『未開の社会組織――進化論的考察』（松園万亀雄訳）、弘文堂。
Shady, Ruth　2006　America's First City?: The Case of Late Archaic Caral. In *Andean Archaeology III. North and South*, edited by W. H. Isbell and H. Silverman, pp. 29-66. Springer, New York.
Smith, Michael E.　2004　The Archaeology of Ancient State Economies. *Annual Review of Anthropology* 33: 73-102.
Souvatzi, Stella　2007　Social Complexity is not the same as Hierarchy. In *Socialising Complexity: Structure, Interaction and Power in Archaeological Discourse*, edited by S. Kohring and S. Wynne-Jones, pp. 37-59. Oxbow Books, Oxford.
Stanish, Charles　2001　The Origin of State Societies in South America. *Annual Review of Anthropology* 30: 41-64.
Stein, Gil J.　1998　Heterogeneity, Power, and Political Economy: Some Current Research Issues in the Archaeology of Old World Complex Societies. *Journal of Archaeological Research* 6(1): 1-44.
Terada, Kazuo and Yoshio Onuki (editors)　1982　*Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979*. University of Tokyo Press, Tokyo.
1985　*The Formative Period in the Cajamarca Basin, Peru: Excavations at Huacaloma and Layzon, 1982*. University of Tokyo Press, Tokyo.
1988　*Las Excavaciones en Cerro Blanco y Huacaloma, Cajamarca, Perú, 1985*. Andes Chosashitsu, Departamento de Antropologia Cultural, Universidad de Tokio, Tokio.
鶴見英成、セサル・サラ　二〇一六　「コトシュ遺跡の測量と形成期早期の神殿研究の展望」、『古代アメリカ』一九号、三五－四六頁。
Wells, E. Christian　2006　Recent Trends in Theorizing Prehispanic Mesoamerican Economics. *Journal of Archaeological Research* 14: 265-312.
Wells, E. Christian and Karla L. Davis-Salazar　2007　Mesoamerican Ritual Economy: Materialization as Ritual and Economic Process. In *Mesoamerican Ritual Economy: Archaeological and Ethnological Perspectives*, edited by E. C. Wells and K. L. Davis-Salazar, pp. 1-26. University Press of Colorado, Boulder.

Yoffee, Norman　1993　Too Many Chiefs? (or Safe Texts for the '90s). In *Archaeological Theory: Who Sets the Agenda?*, edited by N. Yoffee and A. Sherratt, pp. 60–78. Cambridge University Press, Cambridge.
1997　The Obvious and the Chimerical. In *The Archaeology of City-States: Cross-Cultural Approaches*, edited by D. L. Nichols and T. H. Charlton, pp. 255–263. Smithsonian Institution Press, Washington and London.
2001　The Chaco "Rituality" Revisited. In *Chaco Society and Polity: Papers from the 1999 Conference*, edited by L. S. Cordell, J. Judge and J.-e. Piper. New Mexico Archaeological Council Special Publication No 4. New Mexico Archaeological Council, Albuquerque.
2005　*Myths of the Archaic States: Evolution of the Earliest Cities, States, and Civilizations*. Cambridge University Press, Cambridge.
Yoffee, Norman, Suzanne K. Fish and George R. Milner　1999　Comunidades, Ritualities, Chiefdoms: Social Evolution in the American Southwest and Southeast. In *Great Towns and Regional Polities in the Prehistoric American Southwest and Southeast*, edited by J. E. Neitzel, pp. 261–271. University of New Mexico Press, Albuquerque.
渡部森哉　二〇一〇　『インカ帝国の成立――先スペイン期アンデスの社会動態と構造』、春風社。
二〇一三　「アンデス文明形成期の神殿社会」、『人類学研究所研究論集』、一号、三三－五二頁。
二〇一六　「崩壊と再生――古代アンデス諸社会の事例」、『人類学研究所研究論集』、三号、四－二〇頁。
二〇一七　「アンデス的特徴に関する考察」、『古代アメリカ』、二〇号、五七－七八頁。
Watanabe, Shinya　2013　*Estructura en los Andes Antiguos*. Editorial Shumpusha, Yokohama.

附記：本論文は南山大学二〇一八年度パッヘ研究奨励金Ｉ－Ａ－２による研究成果を含む。松本雄一氏（山形大学）には極めて建設的なコメントをいただいた。記して感謝の気持ちを表したい。

（南山大学人文学部教授）

Origins of Civilizations: A Case Study of the Ancient Andes

by

WATANABE Shinya

Ancient Andean civilization dates to 3000 B.C.E., and its beginning is defined by the construction of temples (ceremonial centers). When Andean people started constructing temples, they did not cultivate crops such as maize or potato intensively and they did not use ceramics. During the Formative Period (3000-50 B.C.E.), Andean people constructed many temples and their area of distribution spread, but they did not form politically centralized social organizations such as states. The Formative Period is subdivided into 5 phases: Initial Formative Phase (3000-1500 B.C.E.), Early Formative Phase (1500-1200 B.C.E.), Middle Formative Phase (1200-800 B.C.E.), Late Formative Phase (800-250 B.C.E.), and Final Formative Phase (250-50 B.C.E.). Each temple was renovated at the same place using building materials such as stone or adobe and this resulted in gradual aggrandizement. Parallel to the continuous construction and renovation of temples, Andean formative societies were also aggrandized, and their complexity increased. As the dimensions of temples increased, the scale of societies also increased, so we can say that quantitative change brought about qualitative change. But it was impossible to enlarge temples indefinitely; at some point every temple was abandoned without continued renovations. Thus, Andean temples changed in quality and did not maintain the same conditions. Temples themselves were material objects external to the human body and their size did not indicate the power of the people who led the construction but was related to the amount of manpower accumulated over a long period. Unintended consequences were brought about by the practices of the human ritual groups that constructed the temples.

Andean societies of the Formative Period cannot be defined appropriately by models of political organization such as the state or chiefdom, so the concept of "rituality" is introduced in this paper. Rituality applies to societies that emphasized the ritual, communal, and group solidarity on which these entities were founded. The ritual part of Andean formative societies is of primary significance and is not a characteristic incidental to the polity.

Rituality and polity are treated as distinct layers of a society and the society's character can be explained by their interrelationship.

I introduce the concept "ritual economy" to analyze the relationship between religious ritual and material objects such as temples. Ritual economy is defined as "a theoretical construct that concerns the materialization of socially negotiated values and beliefs through acquisition and consumption aimed at managing meaning and shaping interpretation." By this term we explain a relationship in which political and economic elements are imbedded within ritual. In the case of Andean formative societies, it is constructive to analyze primarily ritual aspects that are not supplemental to political ones. In the case of Andean civilization, the material was tied to the ritual aspect and the complexity of the ritual aspect preceded the political one.

Lastly, I try to explain the mechanism of early temples' renovation activities by using the concepts "cooperation" and "collective action," not "competition" or "leadership of individuals." Cooperation is defined as "actions that require individuals to incur some cost or risk associated with other individuals receiving a benefit" and ritual activities at temples can be seen as a consequence of cooperation, not of competition. Groups of individuals with common interests are expected to act on behalf of their common interests, and collective action treats problems in which the optimal strategy from the perspective of an individual differs from the optimal strategy viewed from the perspective of a group. It is supposed that the population size of an Andean formative society was around 3,000, and did not exceed it. And the question is how it is possible that social size grows in scale without compulsion or political power. To discuss Andean formative cases, the task at hand is how to connect the increase of the repertory of ritual activities (agriculture, alcohol, ceramics, textiles, metal objects, etc.) to the increase in the size of the population at each temple.

Andean civilization was born without state formation, but it resulted in giving birth to states 3,000 years later. Future research is needed to classify ritualities and analyze how political elements were intensified within these ritualities.

Key Words; Andes, Peru, Temple, Civilization, Ritual